

体言化理論によるサンスクリット語関係節の再分類および体言化辞 *yad* の通時的変化<sup>1</sup>

張 倩倩 (東京大学人文社会系研究科 博士課程)

zhangqianqian1011@gmail.com

## 要旨

本稿では、Shibatani (2019) に立脚しつつ、サンスクリット語の関係節の新しい分類を提示した。体言化理論によって分類することで、サンスクリット語の体言化辞 *yad* は、時代が下るにつれて体言化辞の名詞句用法が減少し、修飾用法に限られるようになるという通時的変化を受けたと解釈することが可能となる。また、事態体言と項体言の区別の観点からは、*yad* は事態体言化節を導く機能が減り、項体言化節を導く機能が増加しているということが出来る。従来相関関係節とされてきたものについて、主節にある相関詞を体言化節の修飾しうる要素と解釈したほうが、体言化辞の歴史変化の説明を一般化でき、体言化理論に基づくことでより簡明な分類が可能となるということを示すことができた。さらに、本稿は Shibatani (2019: 129) における名詞句用法から修飾用法への拡張説の検証例ともなると思われる。

## 1 はじめに

## 1.1 サンスクリット語における関係節

サンスクリット語には、相関構造 ([*yad*.....] relative clause, [*tad*<sup>2</sup>.....] main clause) を成す関係節が存在することが知られている。例えば、(1) のような文が相関構造の代表的な例として挙げられる。

- (1) [*yac* ca dvijatvaṃ kuśiko  
REL.PRON(NMLZ).ACC.SG.N. and Brahmanhood-ACC.SG.N. Kuśika-NOM.SG.M.  
na lebhe] *tad* gādhinaḥ sūnur  
NEG. atain-Ā.PERF.3.SG. DEM.PRON.ACC.SG.N. Gādhin-GEN.SG.M. son-NOM.SG.M.  
avāpa rājan, (*Buddhacarita* 1.44a)  
obtain-PERF.3.SG. king-VOC.SG.M.  
“And the Brahmanhood which Kuśika did not win was obtained by the son of Gādhin, O king.”  
(Johnston and Litt 1936: 10)

この文において、主節にある *tad* は関係節にある *yac* (*yad* の連声形) と相関し、ともに *dvijatvaṃ* ‘Brahmanhood’ を指す。*yad* のとっている単数対格は節の中における役割を表し、*tad* のとっている単数対格は主節の中の役割を表している。本稿においては、まずこのように関係節を導く *yad* を関係代名詞、主節で

<sup>1</sup> 本稿の執筆の際に、東京大学人文社会系研究科の言語学研究室の演習にて、塚越柚季氏および鈴木唯氏をはじめ、多くの方から多大な助言をいただきました。まだ反映しきれていないところもありますが、深く感謝を申し上げます。また、原稿に目を通してくださり、コメントをくださった柴谷方良先生に感謝いたします。最後、日本語の校閲をしてくださった大山祐亮氏にもお礼を申し上げます。本研究は JSPS 科研費 JP21J11653 の助成を受けたものです。なお、本稿における全ての問題は筆者の責任です。

<sup>2</sup> この *yad*、*tad* は代名詞 *yad*-、*tad*-の全ての活用形を含む。



したがって、従来の研究における相関関係節の分類は必ずしも実態に則したものではないと考えられる。

## 2 体言化理論によるサンスクリット語の関係節の新しい分類

Shibatani (2019:21) は体言化理論と体言化構造の分類について、次のように定義している。

“Nominalization is a metonymy-based grammatical derivation process yielding constructions associated with a denotation comprised of entity (thing-like) concepts that are metonymically evoked by the nominalization structures, such as events, facts, propositions, resultant products and event participants. Nominalizations, as grammatical structures, are similar to nouns by virtue of their association with an entity-concept denotation; they both denote thing-like concepts, which provide a basis for the referential function of an NP headed by these nominals.”

また、Shibatani によれば、動詞基盤の文法的体言化は事態体言化 (event nominalization) と項体言化(argument nominalization) に大別される。この二種類の体言化について、Shibatani (2019: 40) は次のように述べていおり、これらにおけるメトニミーによる概念喚起の重要性を示唆している。

“Event nominalizations denote events and such abstract concepts as a state of affairs, a fact, or a proposition associated with the denoted events. [中略] Argument nominalizations denote in a clearer manner concrete things and thing-like entities, such as an agentive event protagonist, a patientive protagonist, a beneficiary, an instrument, or a location in close association with the concepts denoted by the verbal stems.”

堂山 (2020: 51–53) は、この体言化理論を利用してサンスクリット語の関係節を分析し、サンスクリット語において従来関係節と呼ばれてきた構造は全て文法的体言化 (項体言) であり、従属接続詞 *yad* は体言化辞であると主張した。しかし、Hettrich (1988: 579) が RV について述べているように、サンスクリット語の *yad*-節には主要部内在型関係節、すなわち Shibatani (2019) の分類における事態体言化に相当するものも存在する点には注意する必要がある。また、堂山 (2020: 49) はサンスクリット語では *yad* の体言化節には修飾する主名詞があるものとならないものがあると述べた。それは Shibatani (2019) における修飾用法と名詞句用法という分類に当てはまると思われる。そのうち、名詞と相関関係詞は主名詞になりうると述べたが、その理由に関しては詳しく述べていない。本稿は、相関関係詞が体言化節の修飾・制限しうる要素とみなせる理由を提示した上で、体言化節の種類 (項体言・事態体言) と用法 (修飾用法・名詞句用法) という二つの基準で、体言化理論による、サンスクリットの関係節の新しい分類方法を提示する。また、体言化によって関係節という概念を利用するよりもより有益な分類が可能となることを示す。

体言化理論を利用すると、相関詞を名詞句の主名詞と分析することが可能となり、従来 8 種類に分類する必要があったサンスクリット語の関係節は、項体言化の名詞句用法、項体言化の修飾用法、事態体言化の名詞句用法、事態体言化の修飾用法の 4 種類に簡潔にまとめることができる。*tad*-は本来「それ」という指示代名詞であるため、実質概念の表示と事物の指示が可能である。したがって、体言化節によって修飾され、制限されうる要素になることを妨げるものはないと考えられる。例えば、以下の例 (4) では、*tad* は相関のためだけに用いられており、特定の事物を指示していないと思われてきた。しかし、この文を体言化理論で分析すると、*yad* が体言化節を導き、メトニミーによって体言化節における事態参加者 *brahma* 「聖なることば」

が喚起され、*tad* を同定していると解釈できる。なお、サンスクリット語ではコピュラ動詞が省略されうるため、*yad* 節内と主節の両方でコピュラ動詞が省略されていると考えられる。

- (4) [*yad*                      brahma]                      *tad*                      amṛtam  
 NMLZ.NOM.SG.    sacred word-NOM.SG.    DEM.PRON.NOM.SG.    immortality-NOM.SG.  
 「聖なることばであるもの、それは不死である。」(*Jaiminīya-Upaniṣad-Brāhmaṇa* 1.26)

また、以下の (5) のような例も、*tad*-が相関詞以外の役割をもつことを支持している。というのも、この文の *tām* (*tad*-の女性単数対格形) は文脈上 *Kaikeyī* という人物を指しており、体言化節部分を削除して *kas tām prāpya...* とすることが可能である。もし *tām* が相関詞としての役割しか持っていないならば、体言化節部分を削除すると非文になるはずである。

- (5) [*yā*                      putraṃ                      pārthivendrasya                      pravāsayati  
 NMLZ.NOM.SG.F.    son-ACC.SG.M.    lord of kings-GEN.SG.M.    expel-PRES.3SG.  
 nirghṛṇā]                      kas                      *tām*                      prāpya                      sukhaṃ    jīved  
 cruel-NOM.SG.F.    who-NOM.SG.M.    DEM.PRON.ACC.SG.F.    obtain-ABS.    at ease    live-OPT.3SG.  
 adharmyām                      duṣṭacāriṇīm    (*Rāmāyaṇa* 2. 42. 21)  
 unrighteous-ACC.SG.F.    wicked-ACC.SG.F.  
 Who could live at ease under that unrighteous, wicked woman, so heartless that she forced into exile the son of the lord of kings? (Pollock 2005: 253)

すなわち、(5) の例においても、*yad* の導いている体言化節は参加者を喚起する修飾用法のある項体言化であり、*tām* を制限しているといえることができる。

また、従来の定義で相関詞とされるものに加えて、従来の定義での主要部名詞が現れる例もある。例えば、例 (6) のような文が挙げられる。

- (6) [*iha*                      caiva                      bhavanti                      *ye*                      saḥāyāḥ  
 in this world    and-indeed    become-PRES.3.SG.    NMLZ.NOM.PL.M.    companion-M.PL.NOM.  
 kaluṣe                      karmaṇi                      dharma-saṃśraye                      vā], avagacchatī  
 dirty-LOC.SG.M.    action-LOC.SG.N.    Dharma-resort-M.LOC.SG.    or.    understand-3.SG.PRES.  
 me                      yathāntarātmā                      niyataṃ                      *te*                      'pi  
 1.PER.PRON.SG.    in that manner-inner soul-NOM.SG.M.    surely-IND.    DEM.PRON.NOM.PL.    too  
 janās                      tad-aṃśa-bhājāḥ.    (*Buddhacarita* 5.77)  
 person-NOM.PL.M.    their-share-enjoying-NOM.PL.M.

“Moreover as for those who are companions in this world whether in action that brings defilement or in resort to dharma, undoubtedly they too, as my inner soul realizes, take their share of the fruit.” (Johnston and Litt 1936: 77)

例 (6) において、*ye* (体言化辞 *yad* の男性複数主格) の導く体言化節は ‘who are companions in this world whether in action that brings defilement or in resort to dharma’ の参加者を喚起し、修飾用法を持つ。この修飾用法

の項体言化節は（従来相関関係をなしている相関詞とされる）*te* (*tad* の男性複数主格形) 「それら」を制限する。また、この *te* 「それら」は従来の主要部 *janās* 「人々」と同格関係「それらの人々」にあると分析する。

以上の三つの例から、従来の定義で相関詞とされてきたものは、実際には指示対象をもち、体言化節に修飾（同定）されうるといことがわかる。つまり、Shibatani (2019) の事態体言化と項体言化という分析によると、従来様々なタイプの関係節構文と認められてきたものが、表 1 のように、二つのタイプの体言化構造とその用法として簡潔に纏め上げることが可能となる。

表 1 体言化による新たな分類

体言化による新たな分類	過去の分類
項体言化・修飾用法	主要部外在型相関・非相関関係節
	主要部なし相関関係節
	Double-headed 相関・非相関関係節
事態体言化・修飾用法	主要部内在型相関関係節
項体言化・名詞句用法	主要部なし（非相関）関係節
事態体言化・名詞句用法	主要部内在型（非相関）関係節

### 3 調査

以下では、古典サンスクリット語に分類される *Buddhacarita* (BCar., 紀元前 1 世紀頃) という文献の関係節のデータを新たに調査し、RV のデータと比較することで、通時的変化をたどることを試みる。

#### 3.1 調査方法

サンスクリット語には長い歴史があり、その歴史の中で主に形態・統語法に変化が生じているため、主に年代に基づいてサンスクリット語をいくつかの段階に分け、それぞれを区別して記述するのが適当であるとされている。一般的には、ヴェーダ語、叙事詩サンスクリット語、古典サンスクリット語という三つの区分に分けられるとされている。その中でも *R̥gveda-Saṃhitā* (RV, 紀元前 12 世紀ごろ) は現存最古の文献であり、とりわけ印欧語学において重要視されている。この RV における関係節については、Hettrich (1988: 579) による詳しい調査と分析が既に存在するため、本稿ではそのデータを利用することとする。

#### 3.2 従来の分類による調査結果

Hettrich (1988: 579) の RV の調査データと、筆者による BCar. の調査データを従来の分類に基づいてまとめると、表 2 のようになる。

表 2 従来の分類による調査結果

	外在 相関	外在 非相関	内在 相関	内在 非相関	なし 相関	なし 非相関	Double 相関	Double 非相関	合計
RV	57 (8.5%)	56 (8.4%)	145 (21.6%)	53 (8%)	261 (39%)	98 (14.6%)	0	0	670 (100%)
BCar.	30 (22.2%)	36 (26.7%)	18 (13.3%)	0	40 (29.6%)	8 (5.9%)	2 (1.5%)	1 (0.8%)	135 (100%)

この表 2 からわかる最も顕著な差異は、従来の分類に基づいた場合、主要部内在型関係節、主要部のない非相関関係節の割合が大きく低くなっていることがわかる。

### 3.3 体言化理論による新しい分類の結果

Hettrich (1988: 579) による RV の調査データと、筆者が追加調査した BCar. のデータを、2.1 節で提示した新しい分類でまとめると、以下の表 3 のようになる。

表 3 体言化理論による新分類

	修飾用法		名詞句用法	
	項体言化	事態体言化	項体言化	事態体言化
RV	374 (55.8%)	145 (21.6%)	98 (14.6%)	53 (8%)
BCar	109 (80.8%)	18 (13.3%)	8 (5.9%)	0

表 3 からは、RV から BCar. にかけて、修飾用法の項体言化が増加し、修飾用法の事態体言化と名詞句用法の項・事態体言化が減少するという顕著な傾向があることがわかる<sup>3</sup>。すなわち、サンスクリット語においては、事態体言化と名詞句用法が時代が下るにつれて減少していると読みとることができる。また、副詞節と補文節を導く機能も減少する傾向にある。この二種類も Shibatani (2019) においては事態体言化と分類されるため、事態体言化がサンスクリット語では全体的に減少する顕著な傾向があると一般化することができる。これは表 2 からは読みとることができないため、体言化理論の分類には従来の分類にはない利点が存在することがわかる。

## 4 分析結果

3 節ではサンスクリット語の最古の文献 RV と古典期の BCar. において *yad* の導きうる節を調査し、その調査結果を従来の分類方法と体言化理論による分類方法でまとめた。従来の分類では、それぞれを細かく区別して言語変化を分析することしかできない。一方で、体言化理論では、名詞句用法と事態体言化が減少していると簡潔に分析することができる。すなわち、修飾用法の体言化節辞と名詞句用法の体言化節辞の区別という点に注目すると、*yad* は時代が下るにつれてほぼ修飾用法の体言化節辞に限られるようになっていったと解釈することができ、体言化理論の分類で従来の分類よりも広い一般化を提示することができたといえる。

また、Shibatani (2019) の提示した事態体言化と項体言化という区別をさらに利用することで、RV から BCar. にかけて事態体言化は顕著に減少し、項体言化は顕著に増加しているという分析も可能となった。さらに、古い文献においては *yad* は時間・原因・理由などの意味を表す、従来副詞節と呼ばれている節や、従来の補文節をも導きうるものであったが、これらの用法も後代になるとほとんど消滅している。このような副詞節も Shibatani (2019) では事態体言化と分析されているため、RV では主要部内在型関係節と副詞節といった体

<sup>3</sup> なお、表 3 のデータで独立性のカイ二乗検定を行った結果、 $\chi^2(3) = 32.599$  であった。 $\chi^2_{0.001}(3) = 16.27$  であるから、 $\chi^2(3) > \chi^2_{0.001}(3)$  が成立し、体言化の用法が何であるかということと、文献が RV と BCar. のどちらであるかということの独立性の仮説は有意水準 0.1% で棄却される。

言化辞の事態体言節を導く用法が、BCar.では減少しているという一般化が可能である。

## 5 結論

本稿では、Shibatani (2019) に立脚しつつ、サンスクリット語の関係節の新しい分類を提示した。まず、主節に現れる指示代名詞 (*tad*) を、ただの相関詞ではなく、体言化節に修飾される要素とみなした。そして、従来の研究における主要部外在型関係節（相関および非相関）、**double-headed** 関係節（相関および非相関）、主要部名詞が相関関係節に内在する場合、主要部名詞がなく相関する場合、という四種を「体言化節の修飾用法」、一方で主要部名詞が内在する非相関関係節と、主要部名詞のない非相関関係節という二種を「名詞句用法」と一般化できる。また、事態体言化と項体言化の区別からすると、従来内在型相関・非相関関係節とされるものは事態体言化であり、他は項体言化であると分類することができた。

このように分類することで、サンスクリット語の体言化辞 *yad* の通時的変化は、時代が下るにつれて体言化辞の名詞句用法が減少し、修飾用法に限られるようになるというものであると解釈することが可能となる。また、事態体言と項体言の区別の観点からは、*yad* は事態体言化節を導く機能が減り、項体言化節を導く機能が増加しているということが出来る。また、今後の課題として、このような変化が何を意味しているかを吟味しなければならない。

本稿では、従来相関関係節とされてきたものについて、主節にある相関詞を体言化節の修飾しうる要素と解釈したほうが、体言化辞の歴史変化の説明を一般化でき、また体言化理論に基づくことでより簡明な分類が可能となるということを示すことができた。さらに、本稿は Shibatani (2019: 129) における名詞句用法から修飾用法への拡張説の検証 (corroboration) 例ともなると思われる。

## 略号

3: third person; Ā: Ātmanepada (middle voice); ABS: absolutive; ACC: accusative case; BCar: Buddhacarita; DEM: demonstrative; F: feminine; GEN: genitive case; IND: indeclinable; INS: instrumental case; LOC: locative; M: masculine; N: neuter; NEG: negative; NMLZ: nominalizer; NOM: nominative case; OPT: optative; PAST: past tense; PER: personal; PERF: perfect; PL: plural number; PRON: pronoun; PRS: present; PTCP: present participle; REL: relative; RV: Ṛgveda-Saṃhitā; SG: single; VOC: vocative case.

## 参考文献

- Andrews, Avery D. (2007) Relative clauses. In: Timothy Shopen (ed.), *Language typology and syntactic description, ii: Complex constructions*. 2nd edition, 206–236. Cambridge: Cambridge University Press.
- Comrie, Bernard (1989) *Language Universals and Linguistic Typology: syntax and morphology*, 2nd edition. Oxford: Blackwell.
- Hettrich, Heinrich (1988) *Untersuchungen zur Hypotaxe im Vedischen*. Berlin; New York: W. de Gruyter.
- Hock, Hans Henrich (1989) Conjoined we stand: theoretical implications of Sanskrit relative structures. *Studies in the Linguistic Sciences* 19(1): 93–126.
- Johnston, Edward Hamilton (1935) *The Buddhacarita: Or, Acts of the Buddha, Part I*. Calcutta: Baptist Mission Press.
- Johnston, Edward Hamilton and D. Litt (1936) *The Buddhacarita or Acts of the Buddha, Part II: Cantos I to xiv translated from the original Sanskrit supplement by the Tibetan version, together with an introduction and notes*. Calcutta: Baptist Mission Press.
- Lehmann, Christian (1986) On the typology of relative clauses. *Linguistics* 24: 663–680.
- Lipták, Anikó (2009) The landscape of correlatives: An empirical and analytical survey. Lipták, Anikó (eds.) *Correlatives cross-linguistically*, 1–46. Amsterdam: John Benjamins Pub. Co.
- Pollock, Sheldon I. (trans.) (2005) *Rāmāyaṇa Book Two: Ayodhyā, by Valmiki*. New York: New York University Press.
- Shibatani (2019) What is nominalization? Towards the theoretical foundations of nominalization. In: Roberto Zariquiey, Masayoshi Shibatani and David W. Fleck (eds.) *Nominalization in Languages of the Americas*, 15–167. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- 堂山英次郎 (2020) 「ヴェーダ〈サンスクリット語〉語の名詞と体言化構造」鄭聖汝・柴谷方良『体言化理論と言語分析』1–58. 吹田：大阪大学出版会。